



レブカでは「ヘリテージツアー」と称して、遺産をめぐるツアーを実施中



【上】住民と開催したワークショップでは、地域の1年間の行事などを記した「フェノロジーカレンダー」を製作
【下】フィジーで出会った子どもたち。彼らが自分たちの故郷に誇りを持って、よなまちづくりを進める

緑豊かな自然に恵まれた平和な暮らしを受け継いでいくための挑戦は、これらが正念場だ。

心掛けています。

多くさんの人が関わるフィジー初のエコミュージアム構想。一体感を生み出すのは簡単ではないが、八百板さんは「地域の人が同じ目標に向かって主体的にまちづくりに関わることが、外部資本にも負けない観光まちづくりの必須条件」と、人の環をつくる支援を心掛けています。

を2度乗り継いだ先にあるオバラウ島東岸の都市。19世紀初頭から南太平洋広域の中心地として欧米の商人や宣教師らによって開発され、英国領下では最初の首都として栄えた。1882年に現在の首都であるスバへ遷都後、経済は低迷したが、パステルカラーで彩られた木造・トタン屋根の邸宅群が海を向いて並んでいる姿が、当時の繁栄を物語っている。

「日本では他の自治体と情報共有がしやすく、まちづくりに政府の保護を受

けることができます。でも、南太平洋の離れ小島でそれぞれが独自に遺産保護を展開し続けるのは過酷。日本の経験を生かして、何かできることはないだろうか。募る思いを胸に、西山教授は、遺産家屋の居住者に関する調査や遺産保護のマネジメント方法を伝えるなどの協力を続けてきた。

孤立した離れ小島を救う エコミュージアムの経緯

しかしいまだ、遺産保護に関する経験が乏しいフィジー。数年内には、外資系企業の進出による地域ビジネスの圧迫、観光客の増加によるごみ問題などに、現在の穏やかな住民生活の存続が妨げられるかもしれない。そこ

で西山教授らは、目前に迫った危機から地域を守るため、2014年にJICA草の根技術協力事業を通じて、コミュニティを基盤とした遺産管理と観光開発のシステム構築のための支援を本格始動した。

「目指すのは、エコミュージアム構想です」と言うのは、八百板季穂特任准教授。エコミュージアムとは「エコロジー」と「ミュージアム」の造語で、地域で受け継がれてきた自然や文化、生活様式を含めた環境全てを、地域住民の参加によって保存していこうとする概念。山口県の「萩まちじゅう博物館」や沖縄県の竹富島など、かつて西山教授が携わった生きた遺産を守りながら進めるまちづくりにも生かされている。

プロジェクトの立ち上げ時、教育文化局から「レブカだけでなく、オバラウ島内の村全てにエコミュージアム構想を広められないか」と提案があった。島内には、地理的要因から西洋人の手が入らず、昔ながらの生活がそのまま残る26の集落がある。西山教授は「オバラウ島全体がフィジーの聖地になり得る」と考えた。地域の人々の誇りにつながる取り組みにしたいと、エコミュージアム構想は島全体を対象に進めることになった。

しかし、観光協会や住民組織などに聞き取り調査を続ける中、みんなの考えはばらばら。そこで、八百板さんはこれから目指すべき島の将来像を共有してもらおうと、政府高官から村の観光協会メンバーまで一人一人に会って構想を説明し、まちづくりに携わる人々を集めて会合を実施。地域全体を観光地として捉え、その価値を再発見し、住民の視点からエコミュージアムの基盤づくりを行っている。

富士山がユネスコの世界遺産に登録され、日本中が湧いた2013年。この年、日本から約7000キロ離れた大洋州の島国でも、同じく歓喜の声が

上がっていた。フィジーの古都レブカが、この国で初めての世界遺産に登録されたのだ。町全体としての登録は、オセアニアでも初だ。

「レブカに残る主な歴史的建築物は、1860年代から1920年代までの各時期の繁栄を示す貴重なものです」。

そう話すのは、北海道大学観光学高等研究センターの西山徳明教授だ。西山教授が初めてレブカを訪れたのは2003年。「歴史的な価値と、住民が住み続けているからこそ生み出される、生きた遺産」の素晴らしさに驚いたという。語り継がれてきた歴史を後世に

残すことを目指した住民組織「レブカ遺産委員会」のジョージ・ギブソン会長から地域の人々の手でその景観を守ってきた努力を聞き、さらに感銘を受けた。

レブカは、フィジーの玄関口でもある国際空港ナンディから、プロペラ機



レブカ遺産委員会ギブソン会長(右から2人目)らと、まちづくりの構想について議論

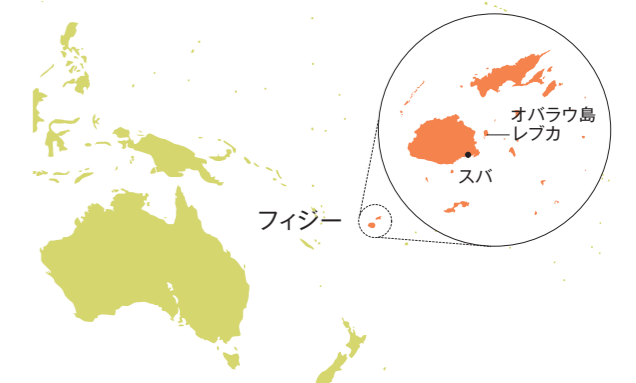


国際協力の担い手たち

国立大学法人 北海道大学

生きた遺産を守るまちづくり

世界遺産の誕生を受けて、観光客の増加が見込まれるフィジー。住民が取り組む新たなまちづくりに生かされているのが、日本の観光開発の手法だ。



住民の手で守られてきた美しい町並み。オセアニアとヨーロッパの文化交流、植民都市の歴史が感じられる

